



TITLE:

# 直観論的理論とトポス (Boole代数値の解析学と超準解析)

AUTHOR(S):

上江洲, 忠弘

---

CITATION:

上江洲, 忠弘. 直観論的理論とトポス (Boole代数値の解析学と超準解析). 数理解析研究所講究録 1981, 441: 93-115

ISSUE DATE:

1981-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/102829>

RIGHT:

## 直観論的理論とトポス

九大 理 上江洲 忠弘

高階直観論理とトポスとの関係は, M. P. Fourman (1977), A. Boileau & A. Joyal (1981) 等によって明らかにされている. ここでは, 彼らのように, 高階直観論理の体系を考えることなく, Lawvere 流の“理論”の観点から, 直観論的理論とトポスとの関係を論ずる.

## 1. 圏に於ける変数

この章で導入される記法や結果は, 次章以下で断りなしに用いる.

$C$  を有限積を持つ圏とし,  $V$  を変数の集まり,  $*$  を変数に  $C$  の対象を対応させる対応関係とする. 変数  $x$  に対応する  $C$  の対象  $c_x^*$  を  $x$  の 変域 と呼ぶ.

$V$  の各有限部分集合  $\{x_1, \dots, x_m\}$  に対し, 新しい対象

$\overline{\{x_1, \dots, x_m\}}$  も,  $x_1^{\#}, \dots, x_m^{\#}$  の  $C$  に於ける積と同形になるように,  $C$  に添加する. このようにして得られる, 圏  $C$  の拡張  $\overline{C}$  も,  $V, \#$  に関する  $C$  上の 変数系 という.

変数  $x_1, \dots, x_m$  に対し,  $x_1^{\#}, \dots, x_m^{\#}$  の  $C$  に於ける積を  $x_1^{\#} \times \dots \times x_m^{\#}$  で表し, 添加された対象  $\overline{\{x_1, \dots, x_m\}}$  から積  $x_1^{\#} \times \dots \times x_m^{\#}$  への同形射を  $(x_1, \dots, x_m): \overline{\{x_1, \dots, x_m\}} \rightarrow x_1^{\#} \times \dots \times x_m^{\#}$  で表す. また, 射影は  $x_i: \overline{\{x_1, \dots, x_m\}} \rightarrow x_i^{\#}$  で表す. 更に逆射は  $(x_1, \dots, x_m)^{\leftarrow}: x_1^{\#} \times \dots \times x_m^{\#} \rightarrow \overline{\{x_1, \dots, x_m\}}$  で表す.

$X$  が  $V$  の有限部分集合,  $A$  が圏  $C$  の対象のとき, 変数系  $\overline{C}$  の射  $f: \overline{X} \rightarrow A$  を  $C$  上の  $v \rightarrow$  射 と呼ぶ.  $x \in X$  のとき  $x$  は  $f$  に含まれるという.

$X, Y$  が共に  $V$  の有限部分集合で,  $X \subseteq Y$  のとき,  $X: \overline{Y} \rightarrow \overline{X}$  で次の図を可換にする  $\overline{C}$  の射を表す.

$$\begin{array}{ccc} \overline{Y} & & \\ \downarrow X & \searrow x & \\ \overline{X} & \xrightarrow{x} & x^{\#} \end{array} \quad (x \in X)$$

$v \rightarrow$  射  $f: \overline{X} \rightarrow A$ ,  $g: \overline{Y} \rightarrow A$  に対し,  $f \doteq g$  で次の図が可換であることを示す.

$$\begin{array}{ccc} \overline{X \cup Y} & \xrightarrow{Y} & \overline{Y} \\ \downarrow X & & \downarrow g \\ \overline{X} & \xrightarrow{f} & A \end{array}$$

$v \mapsto$  射  $g_1: \overline{Y_1} \rightarrow A_1, \dots, g_n: \overline{Y_n} \rightarrow A_n$  に対し,

$$(g_1, \dots, g_n): \overline{Y_1 \cup \dots \cup Y_n} \rightarrow A_1 \times \dots \times A_n$$

で次の図を可換にする射を表す.

$$\begin{array}{ccc} \overline{Y_1 \cup \dots \cup Y_n} & \xrightarrow{Y_i} & \overline{Y_i} \\ (g_1, \dots, g_n) \downarrow & (i=1, \dots, n) & \downarrow g_i \\ A_1 \times \dots \times A_n & \xrightarrow{\pi_i} & A_i \end{array}$$

また,  $y_1^\# = A_1, \dots, y_n^\# = A_n$  のとき

$$\begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ g_1 & \dots & g_n \end{pmatrix}$$

を代入といい,  $v \mapsto$  射

$$(x_1, \dots, x_m, y_{i_1}, \dots, y_{i_k}): \overline{\{x_1, \dots, x_m, y_{i_1}, \dots, y_{i_k}\}} \rightarrow x_1^\# \times \dots \times x_m^\# \times y_{i_1}^\# \times \dots \times y_{i_k}^\#$$

に対し,

$$(x_1, \dots, x_m, y_{i_1}, \dots, y_{i_k}) \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ g_1 & \dots & g_n \end{pmatrix}$$

は  $v \mapsto$  射

$$(x_1, \dots, x_m, g_{i_1}, \dots, g_{i_k}): \overline{\{x_1, \dots, x_m\} \cup Y_{i_1} \cup \dots \cup Y_{i_k}} \rightarrow x_1^\# \times \dots \times x_m^\# \times y_{i_1}^\# \times \dots \times y_{i_k}^\#$$

を表す. 但し,  $1 \leq i_1, \dots, i_k \leq n$  で,  $x_1, \dots, x_m, y_1, \dots, y_n$  は互に異なる.

互に異なる変数  $y_1, \dots, y_n$  と,  $C$  の対象  $A$  に対し, 冪  $A^{y_1^\# \times \dots \times y_n^\#}$  が  $C$  にあるとき,  $v \mapsto$  射  $f: \overline{X} \rightarrow A$  に対し

$$y_1 \cdots y_n \text{f} : \overline{X - \{y_1, \dots, y_n\}} \rightarrow A^{y_1^\# \times \cdots \times y_n^\#}$$

で、次の図を可換にする  $v$  射を表す.

$$\begin{array}{ccc} \overline{\{y_1, \dots, y_n\} \cup X} & \xrightarrow{X} & \overline{X} \\ (y_1, \dots, y_n, y_1 \cdots y_n \text{f}) \downarrow & & \downarrow \text{f} \\ y_1^\# \times \cdots \times y_n^\# \times A^{y_1^\# \times \cdots \times y_n^\#} & \xrightarrow{ev} & A \end{array}$$

この  $v$  射  $y_1 \cdots y_n \text{f}$  も  $\text{f}$  からの  $y_1, \dots, y_n$  に関する アブストラクト という.

$v$  射  $\text{f}: \overline{X} \rightarrow A$  と、変数の集合  $\{y_1, \dots, y_n\}$  に対し、  
 $X \subseteq \{y_1, \dots, y_n\}$  のとき、 $\lambda y_1 \cdots y_n. \text{f} : y_1^\# \times \cdots \times y_n^\# \rightarrow A$  で  
 次のような合成射を表す.

$$\begin{array}{ccc} y_1^\# \times \cdots \times y_n^\# & \xrightarrow{\lambda y_1 \cdots y_n. \text{f}} & A \\ (y_1, \dots, y_n) \nwarrow \downarrow & & \uparrow \text{f} \\ \overline{\{y_1, \dots, y_n\}} & \xrightarrow{X} & \overline{X} \end{array}$$

命題 (1)  $v$  射  $\text{f}: \overline{\{x_1, \dots, x_m\}} \rightarrow A$  に対し、

$\text{f}(x_1, \dots, x_m) = \text{f}$  なる射  $f: x_1^\# \times \cdots \times x_m^\# \rightarrow A$  が一意に存在する.

(2)  $1, \dots, m$  の置換  $i_1, \dots, i_m$  と、射  $g: x_{i_1}^\# \times \cdots \times x_{i_m}^\# \rightarrow A$  に対し、  
 $\text{f}(x_1, \dots, x_m) = g(x_{i_1}, \dots, x_{i_m})$  なる射が一意に存在する.

$$(3) \quad g_1 \doteq g'_1, \dots, g_n \doteq g'_n \quad \text{ならば} \quad (g_1, \dots, g_n) \doteq (g'_1, \dots, g'_n).$$

特に,  $(g_1, \dots, g_n)$  と  $(g'_1, \dots, g'_n)$  との定義域が同じならば,

$$(g_1, \dots, g_n) = (g'_1, \dots, g'_n).$$

$$(4) \quad f \doteq f', \quad g_1 \doteq g'_1, \dots, g_n \doteq g'_n \quad \text{ならば},$$

$$f \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ g_1 & & g_n \end{pmatrix} \doteq f' \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ g'_1 & & g'_n \end{pmatrix}.$$

$$(5) \quad \{y_1, \dots, y_n\} - \{x_1, \dots, x_m\} = \{y_1, \dots, y_k\} \quad \text{ならば}$$

$$f \begin{pmatrix} x_1 & \dots & x_m \\ g_1 & & g_m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ h_1 & & h_n \end{pmatrix} = f \begin{pmatrix} x_1 & \dots & x_m & y_1 & \dots & y_k \\ g_1(h_1, \dots, h_n) & \dots & g_m(h_1, \dots, h_n) & h_1 & \dots & h_k \end{pmatrix}$$

$$(6) \quad y_1 \dots y_n \text{ ev}(y_1, \dots, y_n, x) = x.$$

$$(7) \quad \text{ev}(g_1, \dots, g_n, y_1 \dots y_n f) \doteq f \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ g_1 & & g_n \end{pmatrix}.$$

$$(8) \quad y_1 \dots y_n f = z_1 \dots z_n \left( f \begin{pmatrix} y_1 & \dots & y_n \\ z_1 & & z_n \end{pmatrix} \right),$$

但し,  $y_1^* = z_1^*, \dots, y_n^* = z_n^*$ , また,  $z_1, \dots, z_n$  は  $y_1 \dots y_n f$  に含まれない.

(9)  $x_1, \dots, x_m, y_1, \dots, y_n$  が互に異なり,  $y_1, \dots, y_n$  が,  $g_1, \dots, g_m$  のどれにも含まれないならば,

$$(y_1 \dots y_n f) \begin{pmatrix} x_1 & \dots & x_m \\ g_1 & & g_m \end{pmatrix} = y_1 \dots y_n \left( f \begin{pmatrix} x_1 & \dots & x_m \\ g_1 & & g_m \end{pmatrix} \right).$$

$$(10) \quad f \doteq f' \quad \text{ならば} \quad y_1 \dots y_n f \doteq y_1 \dots y_n f'.$$

(11)  $g$  を射影  $X: \overline{X \cup \{y_1, \dots, y_n\}} \rightarrow \overline{X}$  と  $v$  射  $f: \overline{X} \rightarrow A$  との合成,  $g'$  を射影  $X': \overline{X' \cup \{y_1, \dots, y_n\}} \rightarrow \overline{X'}$  と  $v$  射  $f': \overline{X'} \rightarrow A$  との合成とすると,  $y_1 \dots y_n f = y_1 \dots y_n f'$  ならば  $g = g'$ .

定理  $F: C_1 \rightarrow C_2$  も関手,  $\overline{C}_1$  を  $V_1$ ,  $*$  に関する  $C_1$  上の変数系,  $\overline{C}_2$  を  $V_2$ ,  $^{**}$  に関する  $C_2$  上の変数系とする. 更に,  $V_1 \subseteq V_2$ ,  $V_1$  の各変数  $x$  に対し,  $F(x^*) = x^{**}$  とする. このとき,  $F$  を,  $V_1$  の各有限部分集合  $X$  に対し,  $F(\overline{X}) = \overline{X}$  となるように,  $\overline{C}_1$  から  $\overline{C}_2$  への関手に拡張すると,

$$(1) \quad F\left(f\left(\begin{matrix} y_1 & \dots & y_n \\ g_1 & & g_n \end{matrix}\right)\right) = F(f)\left(\begin{matrix} y_1 & \dots & y_n \\ F(g_1) & & F(g_n) \end{matrix}\right),$$

$$(2) \quad F(y_1 \dots y_n f) = y_1 \dots y_n F(f).$$

## 2. 理論

クラス  $\Sigma$  に対し,  $\Sigma^*$  で  $\Sigma$  の元の有限列 (空も含む) の全体を表し,  $\Sigma \mid \Sigma^+$  で  $\sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n}$  ( $\sigma, \sigma_1, \dots, \sigma_n \in \Sigma$ ;  $n=1, 2, \dots$ ) なる図形の全体を表す.

クラス  $\Sigma$ , 及び  $\Sigma \mid \Sigma^+$  の部分クラス  $\Pi$  に対し, 次の条件をみたす 図 も  $(\Sigma, \Pi)$  上の 理論 という:

(1) 対象のクラスは  $(\Sigma \cup \Psi)^*$ .

(2)  $\Sigma \cup \Psi$  の元  $t_1, \dots, t_n$  に対し, 有限列  $t_1 \dots t_n$  は  $t_1, \dots, t_n$  の積である. 射影は  $\pi_i: t_1 \dots t_n \rightarrow t_i$  ( $i=1, \dots, n$ ) で表す.

(3)  $\Psi$  の元  $\sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n}$  は  $\sigma$  を底,  $\sigma_1 \dots \sigma_n$  を指数とする冪である. 評価射は  $ev: \sigma_1 \dots \sigma_n \sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n} \rightarrow \sigma$  で表す.

$\Sigma$  が唯一つの元だけからなり,  $\Psi$  が空集合のとき,  $(\Sigma, \Psi)$  上の理論は, Lawvere の代数的理論である.

$(\Sigma, \Psi)$  上の理論  $T$  に対し,  $\Psi$  から  $\Sigma$  への対応  $( ): \Psi \rightarrow \Sigma$  と, 同形射  $CD: \gamma \rightarrow (\gamma)$  ( $\gamma \in \Psi$ ) があるとき,  $T$  は  $( ): \Psi \rightarrow \Sigma$  及び  $CD: \gamma \rightarrow (\gamma)$  ( $\gamma \in \Psi$ ) に関して  $\Psi$ -閉 であるという.  $CD: \gamma \rightarrow (\gamma)$  の逆射を  $DC: (\gamma) \rightarrow \gamma$  で表す.

命題 1.  $(\Sigma, \Sigma \mid \Sigma^+)$  上の理論で,  $\Sigma \mid \Sigma^+$ -閉なるものは Cartesian-closed.

命題 2.  $( ): \Psi \rightarrow \Sigma$  及び  $CD: \gamma \rightarrow (\gamma)$  ( $\gamma \in \Psi$ ) に関して  $\Psi$ -閉なる理論に於て, 変数  $x_1, \dots, x_m$  を含み,  $\psi$  射  $f, g$  に対し,  $ev(x_1, \dots, x_m, DC(f)) = ev(x_1, \dots, x_m, DC(g))$



ならば  $f \doteq g$ .

証明.  $ev(\bar{x}, DC(f)) \doteq ev(\bar{x}, DC(g))$  とする. §1 の命題の (6) と (10) より  $DC(f) \doteq DC(g)$ .  $DC$  は同形射であるから  $f \doteq g$ .

命題 3.  $(\Sigma, \Psi)$  上の理論  $T$ , 対応  $(\cdot): \Psi \rightarrow \Sigma$ ,  $T$  の射  $CD: \sigma^{\bar{\sigma}} \rightarrow (\sigma^{\bar{\sigma}})$ ,  $Ap: \bar{\sigma}(\sigma^{\bar{\sigma}}) \rightarrow \sigma$  ( $\sigma^{\bar{\sigma}} \in \Psi$ ) に対し,  $CD$  及び  $Ap$  が次の条件を満たすとする:

$$(1) \quad Ap(\bar{x}, CD(\alpha)) = ev(\bar{x}, \alpha).$$

(2)  $Ap(\bar{x}, f) = Ap(\bar{x}, g)$  ならば  $f = g$ , 但し  $f, g$  には  $\bar{x}$  のどの変数も含まれない.

このとき,  $CD: \sigma^{\bar{\sigma}} \rightarrow (\sigma^{\bar{\sigma}})$  は同形射である. 即ち,  $T$  は  $\Psi$ -閉である.

証明.  $DC = \lambda u. \bar{x} Ap(\bar{x}, u)$  とおく.

$$DC \circ CD(\alpha) = \bar{x} Ap(\bar{x}, CD(\alpha))$$

$$= \bar{x} ev(\bar{x}, \alpha) \quad (\because \text{条件 (1)})$$

$$= \alpha \quad (\because \text{§1 命題 (6)})$$

$$Ap(\bar{x}, CD \circ DC(u)) = ev(\bar{x}, DC(u)) \quad (\because \text{条件 (1)})$$

$$= Ap(\bar{x}, u) \quad (\because \text{§1 命題 (7)})$$

従って, 条件 (2) より  $CD \circ DC(u) = u$ .

(証明終)

命題3の条件(2)は、外延性公理に相当する。

### 3. Heyting 理論と直観論的理論

$\mathcal{T}$  も  $(\Sigma, \Sigma \sqcup \Sigma^+)$  上の理論とし、 $\Omega$  も  $\Sigma$  の元とする。更に、  
 $\equiv: \bar{\tau}\bar{\tau} \rightarrow \Omega$  ( $\bar{\tau} \in (\Sigma \cup \Sigma \sqcup \Sigma^+)^*$ ) を  $\mathcal{T}$  の射とする。

以下、次のような記法を用いる：

$1$  で  $(\Sigma, \Sigma \sqcup \Sigma^+)^*$  の空の元を表す。従って  $11 = 1$ 。

$\text{true}: 1 \rightarrow \Omega$  で  $\equiv: 11 \rightarrow \Omega$  を表す。

$\gamma: \bar{\phi} \rightarrow \Omega$  で  $\text{true}(): \bar{\phi} \rightarrow \Omega$  を表す。ここに、 $\bar{\phi}$  は、 $\mathcal{T}$  上の変数系の、変数の空集合  $\phi$  に対して添加された対象である。

$f \equiv g$  で  $\equiv(f, g)$  を表す。

射  $\wedge: \Omega\Omega \rightarrow \Omega$  も  $\wedge = \lambda uv. (uv) \equiv (\gamma, \gamma)$  で定義する。

$P \wedge Q$  で  $\wedge(P, Q)$  を表す。

理論  $\mathcal{T}$  が次の条件を満たすとき、 $\mathcal{T}$  を 直観論的理論 という。

(I1)  $\mathcal{T}$  の各対象  $A$  に対し、

$$\begin{array}{ccc} A & \longrightarrow & 1 \\ \lambda a. (a, a) \downarrow & & \downarrow \text{true} \\ A A & \xrightarrow{\equiv} & \Omega \end{array}$$

は pullback である.

$$(I2) \quad \begin{array}{ccc} 1 & \longrightarrow & 1 \\ (true, true) \downarrow & & \downarrow true \\ \Omega\Omega & \xrightarrow{\quad} & \Omega \\ \wedge & & \end{array}$$

は pullback である.

(I3) 2つの射  $P: A \rightarrow \Omega$  と  $Q: A \rightarrow \Omega$  に対して,  $\neq$  1 かつ, どんな射  $f: B \rightarrow A$  に対して  $Pf = true_B$  と  $Qf = true_B$  とが同値ならば,  $P = Q$ . 但し,  $true_B: B \rightarrow \Omega$  は射  $B \rightarrow 1$  と射  $true: 1 \rightarrow \Omega$  との合成である.

条件 (I1), (I2), (I3) はそれぞれ次の条件と同等である:

(I1') 2つの  $\vee$ -射  $f, g$  に対して,  $f \equiv g \equiv \top$  と  $f \equiv g$  とは同値である.

(I2') 2つの  $\vee$ -射  $P: \bar{X} \rightarrow \Omega$  と  $Q: \bar{X} \rightarrow \Omega$  に対して,  $P \wedge Q \equiv \top$  と  $P \equiv \top$  かつ  $Q \equiv \top$  とは同値である.

(I3') 2つの  $\vee$ -射  $P: \bar{X} \rightarrow \Omega$  と  $Q: \bar{X} \rightarrow \Omega$  に対して,  $\neq$  1 かつ, どんな代入  $\theta$  に対して  $P\theta \equiv \top$  と  $Q\theta \equiv \top$  とが同値ならば,  $P = Q$ , 但し  $X \neq \emptyset$ .

命題 1.  $T$  が直観的理論ならば, 次のことが成り立つ.

$$(1) ((f \equiv g) \wedge P(\overset{x}{f})) \wedge P(\overset{x}{g}) = (f \equiv g) \wedge P(\overset{x}{f}).$$

(2)  $P \wedge (f \equiv g) \doteq P$  ならば  $P \wedge (xf \equiv xg) \doteq P$ , 但し,  $x$  は  $P$  に含まれない.

$$(3) P \wedge \top = P.$$

$$(4) (P \wedge Q) \wedge R = (Q \wedge R) \wedge P.$$

$$(5) P \wedge (Q \equiv R) = P \wedge (P \wedge Q \equiv P \wedge R).$$

命題 1 の証明のために, 次の補題を用える.

補題 一般の変数系に於いて, 次の事が成り立つ.

(1)  $x_0$  を変域が終対象である変数とするとき,  $v \mapsto$  射  $f: \overline{\phi} \rightarrow A$ ,  $g: \overline{\phi} \rightarrow A$ ,  $h: \overline{\{x_0\}} \rightarrow A$  が  $f \doteq h$  かつ  $g \doteq h$  をみたせば  $f = g$  である.

(2)  $f \doteq g$  で,  $f$  と  $g$  とが同じ定義域を持つ  $v \mapsto$  射ならば  $f = g$  である.

命題 1 の (1) の証明.  $x_0$  を変域が 1 の変数とし,  $f, g, P$  の定義域をそれぞれ  $X, Y, Z$  とする. 変数の集合  $W$  を,  $X \cup Y \cup (Z - \{x_0\}) = \phi$  のとき,  $W = \{x_0\}$ , そうでないとき,  $W = X \cup Y \cup (Z - \{x_0\})$  と定める.  $v \mapsto$  射  $f', g', P'$  を

$\gamma$  の定義域が  $\overline{W}, \overline{W}, \overline{W \cup Z}$  で,  $f \doteq f', g \doteq g', P \doteq P'$  なるものとする.

$\theta$  を  $(\frac{y_1}{k_1} \dots \frac{y_n}{k_n})$  なる代入とし, どの  $y_1, \dots, y_n$  も  $x$  とは異なつものとする.

今,  $((f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'}))\theta \doteq \gamma$  とする. 条件 (I1'), (I2') より  $f\theta = g'\theta$  から  $P'(\frac{x}{f'})\theta \doteq \gamma$ . SI の命題の (5) と  $f\theta = g'\theta$  であることから  $P'(\frac{x}{f'})\theta = P'(\frac{x}{g'})\theta$ . 従つて,  $P'(\frac{x}{f'})\theta \doteq \gamma$  より  $P'(\frac{x}{g'})\theta \doteq \gamma$ . 故に,  $((f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'})) \wedge P'(\frac{x}{g'})\theta \doteq \gamma$ . 従つて, 条件 (I3') より,

$$((f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'})) \wedge P'(\frac{x}{g'}) = (f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'}).$$

ところで,  $f \doteq f', g \doteq g', P \doteq P'$  より

$$\begin{aligned} ((f \doteq g) \wedge P(\frac{x}{f})) \wedge P(\frac{x}{g}) &\doteq ((f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'})) \wedge P'(\frac{x}{g'}), \\ (f \doteq g) \wedge P(\frac{x}{f}) &\doteq (f \doteq g') \wedge P'(\frac{x}{f'}). \end{aligned}$$

従つて,  $X \cup Y \cup (Z - \{x\}) = \emptyset$  のときは, 補題の (1) より, そうでないときは, 補題の (2) より,

$$((f \doteq g) \wedge P(\frac{x}{f})) \wedge P(\frac{x}{g}) = (f \doteq g) \wedge P(\frac{x}{f}).$$

(証明終)

命題 1 の (2) ~ (5) は (1) の場合と同様に 17 証明できる.

理論  $T$  が条件 (I1) 及び命題 1 の (1) ~ (5) をみたすとき,

$\mathcal{T}$  を Heyting 理論 という.

命題 2.  $\mathcal{T}$  が Heyting 理論ならば, 次の事が成り立つ.

- (1)  $P \wedge Q = Q \wedge P$ .
- (2)  $(P \wedge Q) \wedge R = P \wedge (Q \wedge R)$ .
- (3)  $P \wedge P = P$ .
- (4) 条件 (I3).

値域が  $\Omega$  である  $v$ -射  $P_1, \dots, P_n, Q$  に対し,  $P_1, \dots, P_n \rightarrow Q$  で  $P_1 \wedge \dots \wedge P_n \equiv P_1 \wedge \dots \wedge P_n \wedge Q$  なることを示す. また,  $\vdash Q$  で  $Q \equiv \top$  なることを示す.

「 $\Gamma \rightarrow Q_1, \dots, \Gamma \rightarrow Q_n$  ならば  $\Gamma \rightarrow Q$ 」ということ

$$\frac{\Gamma \rightarrow Q_1 \quad \dots \quad \Gamma \rightarrow Q_n}{\Gamma \rightarrow Q}$$

で表す.

命題 3.  $\mathcal{T}$  が Heyting 理論ならば, 次の事が成り立つ.

- (1)  $\vdash f \equiv f$ .
- (2)  $f \equiv g, P(f) \rightarrow P(g)$ .

$$(3) \quad \frac{P_1, \dots, P_n \rightarrow Q}{P_1\theta, \dots, P_n\theta \rightarrow Q\theta},$$

但し,  $\theta$  は任意の代入である.

$$(4) \quad \frac{\Gamma \rightarrow Q}{\Gamma' \rightarrow Q'},$$

但し,  $Q \equiv Q'$  であり, また,  $\Gamma$  の各  $\mapsto$  射  $P$  に対し,  $P \equiv P'$  となる  $\mapsto$  射  $P'$  が  $\Gamma'$  にある. 更に,  $\Gamma$  や  $Q$  に含まれる変数は,  $\Gamma'$  または  $Q'$  に含まれる.

$$(5) \quad \frac{\Gamma \rightarrow Q \quad Q, \Gamma \rightarrow R}{\Gamma \rightarrow R},$$

但し,  $Q$  に含まれる変数は  $\Gamma$  または  $R$  に含まれる.

$$(6) \quad \frac{\Gamma \rightarrow P \quad \Gamma \rightarrow Q}{\Gamma \rightarrow P \wedge Q}.$$

$$(7) \quad \frac{P, \Gamma \rightarrow R}{P \wedge Q, \Gamma \rightarrow R}, \quad \frac{Q, \Gamma \rightarrow R}{P \wedge Q, \Gamma \rightarrow R}.$$

$$(8) \quad \frac{P, \Gamma \rightarrow Q \quad Q, \Gamma \rightarrow P}{\Gamma \rightarrow P \equiv Q}.$$

$$(9) \quad \frac{\Gamma \rightarrow f \equiv g}{\Gamma \rightarrow xf \equiv xg},$$

但し,  $x$  は  $\Gamma$  に含まれない.

命題 4.  $T$  は Heyting 理論であるとする.

(1) 次のような射  $\forall: \Omega^A \rightarrow \Omega$  が一意に存在する:

$$\frac{\Gamma \rightarrow Q}{\Gamma \rightarrow \forall x Q},$$

但し,  $x^{\#} = A$  で,  $x$  は  $\Gamma$  に含まれない.

$$\frac{P(\frac{x}{t}), \Gamma \rightarrow Q}{\forall x P, \Gamma \rightarrow Q},$$

但し,  $t$  に含まれる変数は,  $\forall x P, \Gamma$  又は  $Q$  に含まれる. また,  $x^{\#} = A$ .

(2) 次のような射  $\exists: \Omega^A \rightarrow \Omega$  が一意に存在する.

$$\frac{\Gamma \rightarrow Q(\frac{x}{t})}{\Gamma \rightarrow \exists x Q},$$

但し,  $t$  に含まれる変数は,  $\Gamma$  又は  $\exists x Q$  に含まれる. また,  $x^{\#} = A$ .

$$\frac{P, \Gamma \rightarrow Q}{\exists x P, \Gamma \rightarrow Q},$$

但し,  $x^{\#} = A$  で,  $x$  は  $\Gamma, Q$  に含まれない.

証明. (1)  $\forall: \Omega^A \rightarrow \Omega$  を  $\forall = \lambda \alpha. (\alpha \equiv x \gamma)$  で定義すればよい.

(2)  $\exists: \Omega^A \rightarrow \Omega$  を  $\exists = \lambda u v. (u \vee v \equiv u)$  とし,  $\exists: \Omega^A \rightarrow \Omega$  を  $\exists = \lambda \alpha. \forall w (\forall x (e v(x, \alpha) \supset w) \supset w)$  で定義すればよい.



射  $! : \Omega^B \rightarrow \Omega^B$  を次のように定義する:

$$! = \lambda \beta. b \forall x (ev(x, \beta) \equiv (b \equiv x)).$$

命題 5.  $\mathcal{T}$  は直観論的理論であるとする. 次の図を考える.

$$\begin{array}{ccc} B & \longrightarrow & 1 \\ h \downarrow & (i) & \downarrow true \\ A & \xrightarrow{P} & \Omega \end{array},$$

但し,  $B \in \Sigma^* - \{1\}$ ,  $A$  は  $\mathcal{T}$  の任意の対象である.

(1) 図 (i) が pullback ならば  $P = \lambda a. \exists b (h(b) \equiv a)$ .

(2) 次の2つの条件は同等である.

(a)  $\models \exists ! b Q(c, b)$  なる射  $Q: C \times B \rightarrow \Omega$  に対し,  
 $\models Q(c, g(c))$  なる射  $g: C \rightarrow B$  が一意に存在する.

(b) 任意の単射  $h: B \rightarrow A$  に対し, (i) を pullback とする射  $P: A \rightarrow \Omega$  が一意に存在する.

証明 (2) の (b)  $\Rightarrow$  (a) のみを示す.

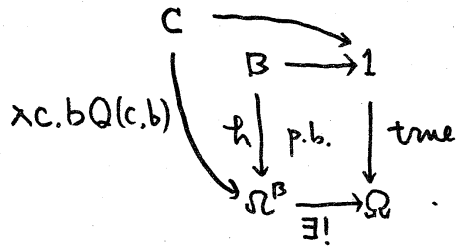
射  $h: B \rightarrow \Omega^B$  を  $h = \lambda x. y (y \equiv x)$  と定義する.  $h$  は単射であるから, 条件 (b) より, (i) を pullback とする射  $P: \Omega^B \rightarrow \Omega$  が存在する. (1) より,  $P = \lambda a. \exists b (h(b) \equiv \beta)$ .  
 $h(b) \equiv \beta = y (y \equiv b) \equiv y ev(y, \beta)$ . 命題3の (1), (2) より,  
 $y (y \equiv b) \equiv y ev(y, \beta) \rightarrow (y \equiv b) \equiv ev(y, \beta)$ . 従って,  $\forall$  の定義より,  
 $y (y \equiv b) \equiv y ev(y, \beta) \rightarrow \forall y ((y \equiv b) \equiv ev(y, \beta))$ . また,  $\forall$  の

定義と, 命題3の(9)より  $\forall y ((y \equiv b) \equiv \text{ev}(y, \beta)) \rightarrow y(y \equiv b) \equiv y \text{ev}(y, \beta)$ .

従って,  $y(y \equiv b) \equiv y \text{ev}(y, \beta) = \forall y ((y \equiv b) \equiv \text{ev}(y, \beta))$ . 故に,

$\neg h(b) \equiv \beta = \forall y (\text{ev}(y, \beta) \equiv (b \equiv y))$ . 即ち,  $P = \exists!$ .

よって,  $\vdash \exists! b Q(c, b)$  とする. 可換な図



より,  $\neg h(g(c)) = b Q(c, b)$  なる射  $g: C \rightarrow B$  が存在し,

$\neg h(g(c)) = b Q(c, b)$  ならば,  $(g(c) \equiv b) = Q(c, b)$  故  $\vdash Q(c, g(c))$ .

従って,  $\vdash Q(c, g(c))$  なる射  $g: C \rightarrow B$  が一意に存在する.

命題6.  $\mathcal{T}$  は Heyting 理論であるとする. 射  $P: A \rightarrow \Omega$  に対し

1,  $P = \lambda a. \exists b (\neg h(b) \equiv a)$  なる射  $\neg h: B \rightarrow A$  が存在する

ならば,  $\mathcal{T}$  は直観論的理論である.

証明. 条件 (I3) が成り立つことを示せばよい. 今,

$P = \lambda a. \exists b (\neg h(b) \equiv a)$ ,  $Q = \lambda a. \exists c (h(c) \equiv a)$  と, 任意の射

$g: D \rightarrow A$  に対し,  $Pg = \text{true}_D$  と  $Qg = \text{true}_D$  が同値

であるとする.  $Pg = \text{true}_D$  であるから  $Qg = \text{true}_D$ , 即ち

$\vdash \exists c (h(c) \equiv h(b))$ . 従って,  $\exists b (\neg h(b) \equiv a) \rightarrow \exists c (h(c) \equiv a)$ .

同様に,  $\exists c (h(c) \equiv a) \rightarrow \exists b (\neg h(b) \equiv a)$ . 従って  $P = Q$ .

## 4. 高階直観論的理論とトポス

$\mathcal{T}$  が Heyting (又は直観論的) 理論で, 対応  $(\cdot): \Sigma \mathcal{L} \Sigma^+ \rightarrow \Sigma$  と射  $A_p: \bar{\sigma}(\sigma^{\bar{\sigma}}) \rightarrow \sigma$  ( $\sigma^{\bar{\sigma}} \in \Sigma \mathcal{L} \Sigma^+$ ) が条件

$$(C) \quad \forall \bar{x} \exists! y \text{ ev}(\bar{x}, y, \alpha) \rightarrow \exists! u \forall \bar{x} \text{ ev}(\bar{x}, A_p(\bar{x}, u), \alpha)$$

をみたすとき,  $\mathcal{T}$  を 適用射  $A_p: \bar{\sigma}(\sigma^{\bar{\sigma}}) \rightarrow \sigma$  ( $\sigma^{\bar{\sigma}} \in \Sigma \mathcal{L} \Sigma^+$ ) をもつ 高階 Heyting (又は直観論的) 理論 という.

条件 (C) は次のスキーマと同等である:

$$\forall \bar{x} \exists! y P \rightarrow \exists! u \forall \bar{x} (P \left( \begin{smallmatrix} y \\ A_p(\bar{x}, u) \end{smallmatrix} \right)),$$

但し,  $u$  は  $P$  に含まれない.

定理 1. トポス  $\mathcal{E}$  に対し,  $\tilde{\mathcal{E}}$  を次のような圏とする.

(1)  $\tilde{\mathcal{E}}$  の対象全体は  $(\mathcal{E} \cup \mathcal{E} \mathcal{L} \mathcal{E}^+)^*$ , 但し,  $\mathcal{E}$  は  $\mathcal{E}$  の対象全体のなすクラスである.

(2)  $\mathcal{E}$  の対象  $A_1, \dots, A_n$  に対し, 列  $A_1 \cdots A_n$  は  $\tilde{\mathcal{E}}$  に於て  $A_1, \dots, A_n$  の積である. 但し,  $n=0, 1, 2, \dots$ .

(3)  $\mathcal{E}$  の対象  $A, A_1, \dots, A_n$  に対し,  $A^{A_1 \cdots A_n}$  は  $\tilde{\mathcal{E}}$  に於て,  $A$  を底,  $A_1 \cdots A_n$  を指数とする冪である. ( $n=1, 2, \dots$ )

(4)  $\mathcal{E}$  は  $\tilde{\mathcal{E}}$  の充満部分圏である.

このとき,  $\tilde{\mathcal{E}}$  は  $\mathcal{E}$  と同等であり, また,  $(\mathcal{E}, \mathcal{E} \mathcal{L} \mathcal{E}^+)$  上の高階直観論的理論である. かかる  $\tilde{\mathcal{E}}$  は  $\mathcal{E}$  に対して一意に存在す

る.

証明. 明らか.

定理 2.  $T$  が高階 Heyting 理論で,

- (1)  $\models \exists! b Q(c, b)$  なる射  $Q: C \times B \rightarrow \Omega$  に対し,  
 $\models Q(c, g(c))$  なる射  $g: C \rightarrow B$  が一意に存在し,  
 (2) 各射  $P: A \rightarrow \Omega$  に対し,  $P = \lambda a. \exists b (h(b) \equiv a)$  なる  
 単射  $h: B \rightarrow A$  が存在する  
 ならば,  $T$  はトポスである.

証明.  $A_p: \sigma(\sigma^\sigma) \rightarrow \sigma$  ( $\sigma^\sigma \in \Sigma \mathbb{I} \Sigma^+$ ) を  $T$  の通用射とす.  
 条件 (C) より  $\models \exists! u \forall x (A_p(x, u) \equiv ev(x, \alpha))$ . 従って, 条  
 件 (1) より,  $\models \forall x (A_p(x, CD(\alpha)) \equiv ev(x, \alpha))$  なる射  
 $CD: \sigma^\sigma \rightarrow I(\sigma^\sigma)$  ( $\sigma^\sigma \in \Sigma \mathbb{I} \Sigma^+$ ) が存在す. また, 条件 (C)  
 より,  $\forall x (A_p(x, u) \equiv A_p(x, v)) \rightarrow u \equiv v$ . 従って, §2 命  
 題 1, 命題 3 より,  $T$  は Cartesian-closed.

条件 (2) より, §3 命題 6 から,  $T$  は直観論的理論であつ.  
 また, 条件 (1) と §3 命題 5 (2) とから, 各単射  $h: B \rightarrow A$   
 ( $B \in \Sigma^+$ ) に対し, 図 (i) が pullback となつような射  $P: A \rightarrow \Omega$   
 が一意に存在する.

$$\begin{array}{ccc} B & \longrightarrow & 1 \\ h \downarrow & (i) & \downarrow \text{true} \\ A & \xrightarrow{P} & \Omega \end{array}$$

条件 (1), (2) より, 各射  $P: A \rightarrow \Omega$  に対し, 図 (1) を pullback とする単射  $k: B \rightarrow A$  が存在する.

従って,  $\text{true}: 1 \rightarrow \Omega$  は subobject classifier である.

故に,  $\mathcal{T}$  はトポスである.

(証明終)

$\mathcal{T}$  が高階 Heyting 理論のとき,

$$\begin{aligned} (\exists x_1 \dots x_n) P & \text{ で } v \mapsto \exists z_1 \dots z_n P \left( \begin{matrix} x_1 & x_n \\ z_1^* & z_n^* \end{matrix} \right), \\ (\exists! x_1 \dots x_n) P & \text{ で } v \mapsto \exists! z_1 \dots z_n P \left( \begin{matrix} x_1 & x_n \\ z_1^* & z_n^* \end{matrix} \right) \end{aligned}$$

を表す. ここに,  $x_1, \dots, x_n, z_1, \dots, z_n$  は互に異なる変数で,  $z_1, \dots, z_n$  はいずれも  $P$  に含まれない. また,  $z_i^*$  は,  $x_i$  の変域が  $\Sigma$  の元のときは  $x_i$  自身,  $x_i$  の変域が  $\Sigma \setminus \Sigma^+$  の元の場合は  $\bar{u} A_P(\bar{u}, x_i)$  なるアブストラクトである.

値域が  $\Omega$  の射  $P, Q, G, G'$  に対し,

$$P(\bar{x}), Q(\bar{y}) \rightarrow G(\bar{x}, \bar{y}) \equiv G'(\bar{x}, \bar{y})$$

のとき,  $G \sim_{P,Q} G'$  とする.  $\sim_{P,Q}$  は同値関係である.

$G$  を含む  $\sim_{P,Q}$  に関する同値類を  $\bar{G}: P \rightarrow Q$  で表す.

定理 3.  $\mathcal{T}$  は高階 Heyting 理論とする.  $\bar{\cdot}$  を次のような圏とする.

(1) 対象は, 値域を  $\Omega$  とする  $\mathcal{T}$  の射.

(2)  $P$  から  $Q$  への射は

$$P(x) \rightarrow (\exists! y)(G(x, y) \wedge Q(y))$$

なる  $G$  も含む  $\widetilde{P, Q}$  に関する同値類  $\bar{G}: P \rightarrow Q$ .

(3) 射  $\bar{G}: P \rightarrow Q$  と射  $\bar{H}: Q \rightarrow R$  の合成は

$$\lambda x y. (\exists y)(G(x, y) \wedge Q(y) \wedge H(y, z))$$

を含む  $\widetilde{P, R}$  に関する同値類.

このとき,  $\mathcal{T}$  はトポスである.

証明.  $\mathcal{T}$  は, 定理 2 の条件 (1), (2) が成り立つように,  
 $\mathcal{T}$  を拡張したものであるから, 明らか.

$\mathcal{T}$  が高階 *identifying* 理論で,  $J: \mathcal{T} \rightarrow \mathcal{E}$  は次の条件も満たす関手とする. 但し,  $\mathcal{E}$  はトポスである.

(1)  $\Sigma \cup \Sigma \cup \Sigma^+$  の元  $t_1, \dots, t_n$  に対し,  $J(t_1 \dots t_n)$  は  $J(t_1), \dots, J(t_n)$  の積で, 射影  $\pi_i: t_1 \dots t_n \rightarrow t_i$  に対し,  
 $J(\pi_i): J(t_1 \dots t_n) \rightarrow J(t_i)$  は射影である.

(2)  $J(\sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n})$  は底  $J(\sigma)$ , 指数  $J(\sigma_1 \dots \sigma_n)$  の冪で, 評価射  $ev: \sigma_1 \dots \sigma_n \sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n} \rightarrow \sigma$  に対し,  $J(ev): J(\sigma_1 \dots \sigma_n \sigma^{\sigma_1 \dots \sigma_n}) \rightarrow J(\sigma)$  は評価射である.

(3)  $J(true): J(1) \rightarrow J(\Omega)$  は *subobject classifier*.

(4) 適用射  $A_p: \sigma(\sigma^\sigma) \rightarrow \sigma$  に対し,  $J(A_p): J(\sigma(\sigma^\sigma)) \rightarrow J(\sigma)$  は評価射である.

(5)  $J(\equiv) : J(\tau\tau) \rightarrow J(\Omega)$  は同射である。即ち,

$$\begin{array}{ccc} J(\tau) & \longrightarrow & 1 \\ \Delta \downarrow & & \downarrow \text{true} \\ J(\tau\tau) & \xrightarrow{J(\equiv)} & J(\Omega) \end{array}$$

は pullback である。

このとき,  $J$  を  $T$  の 論理モデル という。

定理 4.  $T$  は高階 Heyting 理論,  $\overline{T}$  は定理 3 で定義されたトポスとする。  $I : T \rightarrow \overline{T}$  を次のような関手とする。

(1)  $T$  の各対象  $A$  に対し,  $I(A) = \text{true}_A$ 。

(2)  $T$  の各射  $f : A \rightarrow B$  に対し,  $I(f) = \overline{\lambda xy. f(x) \equiv y} : \text{true}_A \rightarrow \text{true}_B$ 。

このとき,  $I$  は  $T$  の論理モデルである。

また,  $T$  の各論理モデル  $J : T \rightarrow E$  に対し,  $K \circ I = J$  なる論理関手  $K : \overline{T} \rightarrow E$  が, 同形に関して, 一意に存在する。

証明 明らか。

$T_1, T_2$  をそれぞれ,  $(\Sigma_1, \Sigma_1, \Sigma_1^+)$ ,  $(\Sigma_2, \Sigma_2, \Sigma_2^+)$  上の高階 Heyting 理論とする。関手  $F : T_1 \rightarrow T_2$  が次の条件を満たすとき,  $F$  は H-関手であるという。

(1)  $\sigma \in \Sigma_1$  ならば  $F(\sigma) \in \Sigma_2$ 。

- (2)  $\sigma^{\bar{\sigma}} \in \Sigma_1 \sqcup \Sigma_1^+$  ならば  $F(\sigma^{\bar{\sigma}}) = F(\sigma)^{F(\bar{\sigma})}$ .
- (3)  $t_1, \dots, t_n \in \Sigma_1 \cup \Sigma_1 \sqcup \Sigma_1^+$  ならば  $F(t_1 \dots t_n) = F(t_1) \dots F(t_n)$ .
- (4)  $F(\equiv : \tau\tau \rightarrow \Omega) = \equiv : F(\tau\tau) \rightarrow \Omega$ .
- (5)  $F(A_p : \bar{\sigma}(\sigma^{\bar{\sigma}}) \rightarrow \sigma) = A_p : F(\bar{\sigma})(F(\sigma)^{F(\bar{\sigma})}) \rightarrow F(\sigma)$ .

対象を small な高階 Heyting 理論とし, 射を H-関手の同形に関する同値類とする圏を HH で表す.

対象を small なトポスとし, 射を論理関手の同形に関する同値類とする圏を TT で表す.

定理 5. 定理 1 で定義した  $\sim$  も, 関手  $\sim : TT \rightarrow HH$  に拡張し, 定理 3 で定義した  $\dashv$  も, 関手  $\dashv : HH \rightarrow TT$  に拡張すると,  $\dashv$  は  $\sim$  の左随伴関手である.

証明. 定理 4 より明らか.